

## 使徒の働き2章14-36節 「初めての福音説教」

### 1A 聖霊の傾注 14-21

1B 人々への呼びかけ 14-15

2B 聖書による裏付け 16-21

### 2A イエスを説くペテロ 22-36

1B 不思議としるしによる証し 22

2B 神の計画の十字架 23

3B イエスのよみがえり 24-32

1C 死の縛りからの解放 24

2C ダビデの預言 25-28

3C ダビデの子 29-32

4B 天に上げられたイエス 33-35

5B 十字架につけたイスラエルの全家 36

## 本文

使徒の働き 2 章を開いてください。私たちは、前回、五旬節に聖霊が、一つになって祈っている弟子たちの上により、外国の言葉、異言を語ったのを見ました。五旬節には、エルサレムに世界中に離散しているユダヤ人たちが集まってきています。彼らが、自分たちの住むそれぞれの言葉で、神をほめたたえているので、驚き、当惑していました。その中で、「彼らは新しいぶどう酒に酔っているのだ」と言って、嘲る者たちもいました。

そこで、ペテロが初めて、人々に対して説教をします。その後で、人々が心が刺され、悔い改めてバプテスマを受けます。教会が誕生するのです。私たちは、そのペテロの説教の部分を、今晩は見ていきます。

### 1A 聖霊の傾注 14-21

1B 人々への呼びかけ 14-15

<sup>14</sup> ペテロは十一人とともに立って、声を張り上げ、人々に語りかけた。「ユダヤの皆さん、ならびにエルサレムに住むすべての皆さん、あなたがたにこのことを知っていただきたい。私のことばに耳を傾けていただきたい。

ペテロが立ち上がり、十一人も共に立っています。これから、イエスがよみがえったのだという復活を証言することになるからです。彼らこそが、バプテスマのヨハネの時からイエスと共にいて、復活を目撃した者たちだったからです。「声を張り上げ」ていますが、音響設備があるわけではありま

せんから、人々に聞こえるように今、声を張り上げています。

そして、呼びかけていますが、「ユダヤの皆さん」というのは、ユダヤ地方の人々、すぐそばに住んでいる人々です。そして、「エルサレムに住むすべての皆さん」というのは、今、世界中から祭りを守るためにエルサレムを訪れ、滞在している全ての人々ということです。そして、今、起こっている、それぞれの言語で弟子たちが神を賛美している、この驚くべき現象について一体何のことか、彼らは知りたがっていたので、「私のことばに耳を傾けていただきたい。」とっています。

<sup>15</sup> 今は朝の九時ですから、この人たちは、あなたがたが思っているように酔っているではありません。

ユダヤ人はぶどう酒を飲みますが、夕刻になってから飲みます。さらに、朝の九時は、ユダヤ人にとって日に三度の祈りを献げる最初の時間となります。宮に上って祈るので、ここからも、ここが神殿の敷地であることがわかります。ですから、ここで酒に酔っているということは、あり得ないとして否定しています。

## 2B 聖書による裏付け 16-21

<sup>16</sup> これは、預言者ヨエルによって語られたことです。

ペテロは、彼らが「2:12 いったい、これはどうしたことか」と言っていたので、「こうしたことです」と明確に答えました。彼の説教は、人々の疑問にそのまま答えるものでした。この説教の終わりも、聖霊が注がれているというところで終わり、罪からの悔い改めを説きます。とても明解です。

説教というのは、人々の抱いている疑問や質問に関わりを持っているものでないといけません。説教を聞いても、何を言っているのか分からないことがあります。また、説教を聞くまでは分かっていたのに、逆に分からなくなったということもあるでしょう。ネヘミヤ記に、レビ人たちが民に律法を解き明かしている場面があります。「8:8 彼らが神のみおしえの書を読み、その意味を明快に示したので、民は読まれたことを理解した。」ペテロも、これから明解に示していきます。

そして、弟子たちが、異言で神を賛美していたことについて、それを、預言者ヨエルによって語られたことだとしています。聖書に基づいているのです。みことばの確証としてのしるしであることを思い出してください。マルコの福音書の最後、「16:20 主は彼らとともに働き、みことばを、それに伴うしるしをもって、確かなものとされた。」とあります。みことばが第一にあって、それからしるしがともなうのです。ですから、いろいろな体験やしるしについて、聖書のことばの裏付けがあつてこそ、初めて意味があります。

17『神は言われる。終わりの日に、わたしは すべての人にわたしの霊を注ぐ。あなたがたの息子や娘は預言し、青年は幻を見、老人は夢を見る。18 その日わたしは、わたしのしもべにも、はしためにも、わたしの霊を注ぐ。すると彼らは預言する。19 また、わたしは上は天に不思議を、下は地にしるしを現れさせる。それは血と火と立ち上る煙。20 主の大いなる輝かしい日が来る前に、太陽は闇に、月は血に変わる。21 しかし、主の御名を呼び求める者は みな救われる。』

ペテロは、ヨエルの預言をこのようにして、すぐに引用しました。当時、もちろん、印刷技術が今のようにありません。巻物ですが、それを手軽に持ち運べるものではないです。開くのも、一苦労です。ですから、ペテロはここで、心に、この預言のことばが与えられていたのです。ペテロは、漁師でした。無学でした。しかし、主ご自身と共にいて、しっかり学んでいました。そして何よりも、聖霊による働きがあるからこそ、みことばを語れるのです。「ヨハ 14:26 しかし、助け主、すなわち、父がわたしの名によってお遣わしになる聖霊は、あなたがたにすべてのことを教え、わたしがあなたがたに話したすべてのことを思い起こさせていただきます。」

前に聖霊のバプテスマの約束について学びました。それは、「すべての人にわたしの霊を注ぐ」というものです。旧約時代においては、モーセやダビデなど、神の選ばれた特定の人々に御霊が注がれていました。しかし今や、主イエスを信じる者たち全てに聖霊の約束が与えられています。

そして、御霊が注がれる時の背景です。「終わりの日に」とあります。神が地上に御怒りを終わりの日に注がれる時で、天変地異が起り、それで「主の大いなる輝かしい日」、主が再び来られます。それまでの間に、主の御名を呼び求めればその人は救われるという約束です。主が、今にも来られるという切迫感の中で、御霊を注がれるのです。

## **2A イエスを説くペテロ 22-36**

### **1B 不思議としるしによる証し 22**

22 イスラエルの皆さん、これらのことばを聞いてください。神はナザレ人イエスによって、あなたがたの間で力あるわざと不思議としるしを行い、それによって、あなたがたにこの方を証しされました。それは、あなたがた自身をご承知のことです。

ペテロは、聖霊が注がれたしるしであることを説明した後で、真っ直ぐにイエス・キリストの福音を宣べ伝えます。ここからが、ペテロの本望です。彼らが疑問に思っていたことを、ヨエルの預言からすぐに答えました。そして最終的に33節で、イエスが、「今あなたがたが目にし、耳にしている聖霊を注いでくださったのです。」とまとめています。けれども、今ペテロが伝えたいのは、イエス・キリストご自身です。この方を証しするために、ペテロも使徒たちも立てられています。

聖霊に満たされている時に、私たちは主の命令を行う力が与えられます。聖霊によって、ご自

身の証人となるというのが、イエスの与えられた使命でした。そして、主は捕えられる前に、弟子たちに、「ヨハ 16:14 御霊はわたしの栄光を現されます。」と言われていました。それで、ペテロは聖霊に満たされて、主イエスを宣べ伝えたのです。

彼の語る福音は、イエス・キリストについて七つのことを話します。第一に、「ナザレ人イエス」です。第二に、「不思議としるしで、神であることを証した」ことです。第三に、「十字架につけられた」こと。第四に、「よみがえられた」こと。第五に、天に上られたこと。第六に、神の右の座に着かれたこと。第七が、聖霊を注がれたことです。

第一の、ナザレ人イエスについてです。イエスという名は、ユダヤ人の中で数多くありました。ですから、どこのイエスなのかを特定しなければいけなかったのです。ナザレ出身のイエスが、神からの人なのだということです。

そして神の選ばれた方イエスが、第二に、イエスが「あなたがたの間で力あるわざと不思議としるしを行い」とあります。この方が、行われていたことで、キリストであり、神からの者であることを示しています。イエスが神殿のソロモンの回廊を歩いておられた時に、ユダヤ人たちが取り囲みました。「ヨハ 10:24-26a「あなたは、いつまで私たちに気をもませるのですか。あなたがキリストなら、はっきりと教えてください。」25 イエスは彼らに答えられた。「わたしは話したのに、あなたがたは信じません。わたしが父の名によって行うわざが、わたしについて証しているのに、26a あなたがたは信じません。」

## 2B 神の計画の十字架 23

<sup>23</sup> 神が定めた計画と神の予知によって引き渡されたこのイエスを、あなたがたは律法を持たない人々の手によって十字架につけて殺したのです。

ペテロの語った福音は、第三「十字架」です。彼らが、律法を持たない人々の手、すなわちローマ当局にイエスを引き渡し、そうやって十字架につけて殺したのだと言っています。ペテロは、あの時、下女に「あの人の仲間でしょ？」と言われて、「知らない」といった本人ですが、今は、ここまで大胆に、はっきりと言っています。

しかし、そのことさえ、「神が定めた計画と神の予知によって」のものであることを伝えています。かつて、ヨセフが兄たちによってエジプトに売られました。それはとてつもない悪でした。しかし、彼は兄たちに言います。「創世 50:20 あなたがたは私に悪を謀りましたが、神はそれを、良いことのための計らいとしてくださいました。」これと同じご計画を、神が持っておられたのです。ユダヤ人のためにキリストを遣わされたのに、彼らは拒んだ。しかし、その悪を、神は彼らだけでなく、全世界の救いとされた。これが、神のご計画です。そして、彼らのご自分の遣わした者を拒むことも予

め知っておられて、この計らいを立てておられました。

主が、復活されてから、弟子たちに、聖書を解き明かしました。「ルカ 24:44 わたしがまだあなたがたと一緒にいたころ、あなたがたに話したことばはこうです。わたしについて、モーセの律法と預言者たちの書と詩篇に書いてあることは、すべて成就しなければなりません。」キリストが苦しみを経てから、栄光に入ることについて、聖書全体に予め、預言されていたのです。

### 3B イエスのよみがえり 24-32

#### 1C 死の縛りからの解放 24

<sup>24</sup> しかし神は、イエスを死の苦しみから解き放って、よみがえらせました。この方が死につながれていることなど、あり得なかったからです。

ペテロの語る福音は、第五に「復活」に入ります。ここが彼の説教の中心です。その後のペテロの説教も、また後半部分のパウロの説教でも、すべてが、「神がイエスを死者の中からよみがえらせた」ということが中心になっています。このことが、私たちがイエス・キリストの福音を語る時に、絶対に語らなければいけないことです。

ここで、ペテロは、ここで「死の痛み」と言っていますが、直訳は「陣痛」です。産みの痛みなのです。かつてイエス様が、ご自身のよみがえりをそのように弟子たちに表現しましたね。「ヨハ 16:21-22 女は子を産むとき、苦しみます。自分の時が来たからです。しかし、子を産んでしまうと、一人の人が世に生まれた喜びのために、その激しい痛みをもう覚えていません。あなたがたも今は悲しんでいます。しかし、わたしは再びあなたがたに会います。そして、あなたがたの心は喜びに満たされます。その喜びをあなたがたから奪い去る者はありません。」ペテロが強調しているのは、女が子を産むのを妨げることはできない、その束縛の中に子を置き続けることはできない、出産するのは時間の問題だという意味合いです。そして、「死につながれている」というのは、死という縄目にいつまでも縛り付けることはできない、という意味合いです。死というものに、メシアであり、神からの方を抑えていることはできないのだ、ということです。

ダニエルが、獅子の穴に投げ込まれましたが、次の日の朝、王が見に行くと、確かに生きていました。その時のダニエルの言葉が、イエス様の復活に相通じるものがあります。「ダニ 6:22 私の神が御使いを送り、獅子の口をふさいでくださったので、獅子は私に何の危害も加えませんでした。それは、神の前に私が潔白であることが認められたからです。王よ、あなたに対しても、私は何も悪いことはしていません。」ダニエルは神の前に潔白であることが認められたから、死から救われたのだと言っています。

イエスが罪なき方であることが、よみがえりにより明らかにされたのです。この方は身代わりに

罪人と数えられましたが、正しい方でした。パウロが、そのことを背景にしてこう言っています。「ロマ 4:25 主イエスは、私たちの背きの罪のゆえに死に渡され、私たちが義と認められるために、よみがえられました。」主が正しい方で、それがよみがえりによって証明されました。その義によって、私たちが義と認められたのです。恵みによって、信仰を通して義とみなされました。

### 2C ダビデの預言 25-28

<sup>25</sup> ダビデは、この方について次のように言っています。『私はいつも、主を前にしています。主が私の右におられるので、私は揺るがされることはありません。<sup>26</sup> それゆえ、私の心は喜び、私の舌は喜びにあふれます。私の身も、望みの中に住みます。<sup>27</sup> あなたは、私のたましいをよみに捨て置かず、あなたにある敬虔な者に 滅びをお見せにならないからです。<sup>28</sup> あなたは私に いのちの道を知らせてくださいます。あなたの御前で、私を喜びで満たしてください。』

ペテロは、ヨエルの預言に続いて、聖書によって、イエスのよみがえりを説き明かします。聖書の説き明かしによる説教、講解説教は、実に使徒たちが行っていた説教スタイルです。詩篇 16 篇を説き明かします。

### 3C ダビデの子 29-32

<sup>29</sup> 兄弟たち。父祖ダビデについては、あなたがたに確信をもって言うことができます。彼は死んで葬られ、その墓は今日に至るまで私たちの間にあります。

今、おそらくペテロは神殿の敷地から、大勢のユダヤ人の巡礼者に語っています。神殿の丘はモリヤ山にあります。その南にはシオンの山があり、そこが元祖エルサレムです。ダビデの町と呼ばれたところです。ダビデはこの町のどこかに、王の墓の中に葬られました(Ⅱ列王 2:10)。ですから、明確に誰の目にも、ダビデがよみがえっていないことは明らかです。

しかし 27 節を見てください、「あなたは、私のたましいをよみに捨て置かず、あなたにある敬虔な者に 滅びをお見せにならないからです。」とあります。よみとは、死者の行く所として出てきます。ギリシア語では「ハデス」です。敬虔な方、あるいは聖なる方は、滅びはお見せにならないのだ、とダビデは預言しています。ところが、ダビデ自身は墓に葬られています。

<sup>30</sup> 彼は預言者でしたから、自分の子孫の一人を自分の王座に就かせると、神が誓われたことを知っていました。<sup>31</sup> それで、後のことを予見し、キリストの復活について、『彼はよみに捨て置かれず、そのからだは朽ちて滅びることがない』と語ったのです。

ダビデは、聖霊によって語っており、預言者でした。ですから、詩篇において、自分自身のことを語っているとは限らず、神のことばが与えられ別人について語っていることもあるのです。それが



誰かという、自分の世継ぎの子がキリストとなり、永遠の御国の王となることを前もって告げられていました。「Ⅱサム 7:12-13 あなたの日数が満ち、あなたが先祖とともに眠りにつくとき、わたしは、あなたの身から出る世継ぎの子をあなたの後に起こし、彼の王国を確立させる。彼はわたしの名のために一つの家を建て、わたしは彼の王国の王座をとこしえまでも堅く立てる。」そこで、自分から出てくる子、その子孫キリストを預言する時に、一人称の「私」という言葉を使って、キリストの復活を語ったということです。この方は、朽ちない体で復活することを予見していたのです。

<sup>32</sup> このイエスを、神はよみがえらせました。私たちはみな、そのことの証人です。

ここでペテロは、他の十一人と共に、なぜここにいるのかを述べています。そのイエスの復活を目撃した証人たちなのだ、ということです。

#### 4B 天に上げられたイエス 33-35

<sup>33</sup> ですから、神の右に上げられたイエスが、約束された聖霊を御父から受けて、今あなたがたが目にし、耳にしている聖霊を注いでくださったのです。

ペテロの語る福音の、第六は「神の右の着座」です。以前の学びでお話したように、イエスは死んでよみがえって、そして父のところに戻ることを強く願っていました。「ヨハ 17:5 父よ、今、あなたご自身が御前でわたしの栄光を現してください。世界が始まる前に一緒に持っていたあの栄光を。」そして大祭司カヤパの前で、こう言われました。「マル 14:62 あなたがたは、人の子が力ある方の右の座に着き、そして天の雲とともに来るのを見ることになります。」ペテロが第一の手紙でこう言っています。「3:22 イエス・キリストは天に上り、神の右におられます。御使いたちも、もろもろの権威と権力も、この方に服従しているのです。」それが、「神の右の座に着く」ということです。

そして、第七は、「聖霊の注ぎ」であります。父の御座の右に着いておられるので、そこで聖霊を受けて、主がご自分の父によって、弟子たちに注いでくださったのです。今、それぞれカ国の言葉で神をほめたたえているしるしは、聖霊が注がれたことなのだということです。このことも学びましたが、主が父のところに行ったからこそ、助け主が弟子たちに与えられるのです。「ヨハ 16:7 去って行かなければ、あなたがたのところへ助け主はおいでになりません。でも、行けば、わたしはあなたがたのところへ助け主を遣わします。」

<sup>34</sup> ダビデが天に上ったわけではありません。彼自身こう言っています。『主は、私の主に言われた。あなたは、わたしの右の座に着いていなさい。<sup>35</sup> わたしがあなたの敵を あなたの足台とするまで。』

ペテロは、神の右の座についておられることについて、他の詩篇の箇所を持ち出しました。有名

なメシア詩篇、110 篇です。イエスが、神殿にてユダヤ人指導者と議論をされた時に、「キリストはダビデの子なのに、ダビデがなぜ主と呼んでいるのか？」と問い質したけれども、返答がありませんでした。その時に引用されたのが詩篇 110 篇です。ペテロは明確に、ダビデ自身が、神の右の座に着いておられる方を主と呼んでいるのだから、彼自身のことではないと述べています。

ちなみに、35 節の「足台とするまで」とは主が再臨される時です。座っておられる主が、立つ時がきます。それは、主とキリストに敵対する王たち、その軍隊が集まった時で、ことごとく滅ぼし、制圧する時です。旧約の預言者が数多く預言し、詩篇 110 篇もその一つです。

### 5B 十字架につけたイスラエルの全家 36

<sup>36</sup> ですから、イスラエルの全家は、このことをはっきりと知らなければなりません。神が今や主ともキリストともされたこのイエスを、あなたがたは十字架につけたのです。」

ペテロは、ここで結論を出しています。ここまではっきりと、神はイエスが主でありキリストであることを明らかにされました。不思議やしるしによって、そしてご計画と予知によって、そして復活によって明らかにされました。そして、天から聖霊を降らせてくださったことも、今、自分たちの目の前で起こったのです。その主ともキリストともされた方を、あなたがたはともあろうに、十字架につけて殺してしまったのだ、と断じています。「ヨハ 16:8 その方が来ると、罪について、義について、さばきについて、世の誤りを明らかになさいます。」聖霊に満たされたペテロは、今、はっきりと彼らの罪を明らかにしました。

次回、この福音説教を聞いた、ユダヤ人たちの反応を見ますが、ペテロのことばが、いかに聖霊に導かれて、それで、みことばを語っているかが良く分かります。彼は、手持ちに印刷された聖書を持っていない中、そして、準備する時間もない中、それでも、心と思いにたくわえ、知恵をもって語ることができました。すべて聖霊のわざです。そして、全くぶれることも、それることもなく、イエス・キリストを証しました。それも、聖書を説き明かして証したのです。

ここが、私たちキリスト者が、また教会が召されていることです。聖霊によって、みことばを豊かに宿らせること。聖霊によって、みことばを思い出させていただくこと。すべては、イエスご自身のことなのだということ。中心と焦点がずれてはいけません。そして、何を語っているのかわからないようなものではなく、人々の抱えている疑問にまっすぐに答える内容であることです。